

# 余剰な1本の剣

——古フランス語韻文物語『双剣の騎士』をめぐる——

リシャール・トラクスラー

渡邊浩司訳

## 訳者前書き

2016年9月9日（金）に中央大学駿河台記念館で中央大学人文科学研究所主催による公開研究会が開催され、リシャール・トラクスラー氏（チューリッヒ大学教授）が13世紀前半に古フランス語韻文で書かれた『双剣の騎士』についてフランス語でお話し下さり、渡邊が通訳を担当した。中世仏文学がご専門のトラクスラー氏には、西洋中世のアーサー王物語を扱った多くの著書や学術論文がある。ここに掲載するのは、公開研究会後にトラクスラー氏が若干の修正を施し、脚注を追加した原稿の拙訳である。なお小見出しおよび〔 〕を挟んで補った注は、訳者が追加したものである。

## はじめに

この場にお招きいただいたことをとても嬉しく光栄に思います。また皆さんにはご足労いただきありがとうございます。講演会を実現して下さいました渡邊浩司教授と、こうした機会を快く提供して下さいました人文科学研究所には、とりわけ感謝しております。本当に心苦しく思うのは、日本語が全くできないため、みなさんと直接お話しすることができないことです。私の来日は生まれて初めてですが、10日ほど前からすでに日本の美しさや

素晴らしさを目の当たりにしています。日本語を話したり読んだりすることができないのを残念に思うのは、今日が初めてではありません。今後は精一杯努力したいと思います。さて、快く同時通訳の労を取って下さる渡邊浩司教授には改めて感謝いたします。通訳を介して私のお話を聞いてただけましたら幸いです。

### 「アーサー王物語」伝承における『双剣の騎士』の位置づけ

『双剣の騎士』は古フランス語韻文で書かれたアーサー王物語の1つですが、その創作年代の特定は困難です<sup>1)</sup>。13世紀末かあるいは14世紀初めに筆写された写本ただ1点のみが伝えるこの作品の創作年代を、昔の

---

1) フェルスターは早い時期に『双剣の騎士』の校訂本を刊行している (*Li Chevaliers as deus espees*, hrsg. von Wendelin Foerster, Halle, Max Niemeyer, 1877, LXIV + 429 p. (Réédition: Amsterdam, Rodopi, 1966))。フェルスターはテキストにかなりの修正を施しているが、それは学術的な観点から行われたものである。このフェルスター版へは簡単にアクセスすることができ、いつでも利用可能である (<http://archive.org/details/lichevaliersasde00foeruoft>)。『双剣の騎士』校訂の試みは最近でもなされており、アイヴィ版 (*Le Chevalier as deus espees*, ed. by Robert Toombs Ivey, Lewiston, N.Y. ; Lampeter, Edwin Mellen Press, c 2006) に続いて、現代英語訳が添えられたロックウェル版 (*Le Chevalier as deus espees*, edited and translated by Paul Vincent ROCKWELL, Cambridge, D. S. Brewer, 2006 (Arthurian Archives XIII)) が刊行されている。英訳にはフェルスター版に依拠しつつ、複数の書評で指摘された問題を反映したものもある (*The Knight of the Two Swords: A Thirteenth-Century Arthurian Romance*, translated by Ross G. ARTHUR et Noel L. CORBETT, Gainesville, Univ. Press of Florida, 1996)。ロックウェル版に依拠した読みやすい現代仏語訳もあり、これも参照可能である (*Le Chevalier aux deux épées. Roman arthurien du XIII<sup>e</sup> siècle*, texte présenté et traduit par Damien de CARNÉ, Paris, Classiques Garnier, 2012 (Moyen Âge en Traduction 2))。このように『双剣の騎士』の校訂本は3点刊行されているが、解決すべき校訂上の問題は今も残されたままである。ロックウェル版については、キブラーの書評 (William Kibler, *Encomia* 28 (2006), pp.68-69) と私の書評 (Richard Trachsler, *Vox Romanica*, 69 (2010), pp. 295-300) を参照。

研究者たちは13世紀中頃と推測しました。これに対して最近の研究者たちは創作年代をさらに遡らせる傾向にあり、1230年あたりだと考えています<sup>2)</sup>。作品以外には傍証となる証言が全く残されていないため、『双剣の騎士』について確実に言えるのは、いくつかの点から見て「アーサー王物語」というジャンルの創始者クレティアン・ド・トロワから始まる伝統の中に、かなりはっきりと位置づけられることです。『双剣の騎士』は、ただ単にモチーフ群だけでなく、物語構造の一部までもクレティアンの『グラアルの物語』[慣例では『聖杯の物語』と呼ばれる作品]を利用してあります。クレティアンが未完のまま残した最後の作品『グラアルの物語』の推定創作年代のうち、最も新しいのが1196年であるため、『双剣の騎士』は必然的に1196年以降に著されたこととなります<sup>3)</sup>。

韻文で書かれたアーサー王物語はおよそ20作品が現存しています。しかしその中でも『双剣の騎士』は孤立した作品ではありません。12360行を数える『双剣の騎士』は、クレティアン・ド・トロワの初期の作品群と比較すると、確かに分量ははるかに多くなっています。クレティアンの

---

2) 『双剣の騎士』の推定創作年代については、ド・カルネによる解説を参照 (de CARNÉ, *Le Chevalier aux deux épées*, op. cit., p. 9)。

3) 研究者の中には、『双剣の騎士』が古フランス語散文による『バラエン物語』の着想源だと想定した者もいる。バラエンとは別の「双剣の騎士」であり、その物語は長大な「後期流布本サイクル」の中で語られている。「後期流布本サイクル」は通例1240年以前に完成したとされるが、確証がある訳ではない。『双剣の騎士』と『バラエン物語』に何らかの関連があるとすれば、『双剣の騎士』の創作時期は、クレティアン・ド・トロワ作『グラアルの物語』の創作時期と『バラエン物語』の創作時期に間に位置することになる。『バラエン物語』の校訂本は「後期流布本サイクル」全体とは独立して、早い時期に刊行されている (*Le Roman de Balain. A prose Romance of the thirteenth century*, éd. par M. Dominica LEGGE, Manchester, Manchester University Press, 1942 (French Classics))。現在参照すべき校訂本は、ジル・ルシノー校訂による『続メルラン物語』であり (*La suite du roman de Merlin*, édition critique de Gilles ROUSSINEAU, Genève, Droz, 1996 (Textes Littéraires Français 472))、バラエンの物語は§§94-238に見つかる。

初期の作品群とは『エレックとエニッド』、『クリジェス』、『イヴァンまたはライオンを連れた騎士』[以下『イヴァン』と略記]、『ランスロまたは荷車の騎士』[以下『ランスロ』と略記]で、いずれも8音節詩句を用いて書かれています。1編あたり6600行から7100行の間に収まっています。これに対してクレティアンの遺作『グラアルの物語』は未完で、9000行あたりで中断しているため、分量の点で『双剣の騎士』は『グラアルの物語』にかなり近いのです。韻文で書かれた一連のアーサー王物語の中には実際のところ、12000行をはるかに越える長編作品がいくつかあり、それらは『双剣の騎士』と重要な特徴を1つ共有しています<sup>4)</sup>。その特徴はクレティアンの『グラアルの物語』に初めて認められるものであり、2人の主人公の冒険を別々に辿っていくという特徴です。2人の主人公を待ち受ける運命は重なりあい、補いあうものとなっています。こうした特徴を備えているのは、『リゴメールの驚異』(約17000行)、『エスカノール』(約26000行)、『クラリスとラリス』(約30000行)です。このうち、ペアをなす2人の親友を登場させている『クラリスとラリス』を別にすれば、他の作品では2人の主人公のうちの1人は、アーサー王宮廷に迎えらるることになる名無しの主人公であり、もう1人は必ずアー

---

4) 韻文によるアーサー王物語群の入門書としては、私が作成した書誌が参考になる(Richard Trachsler, *Les Romans Arthuriens en vers après Chrétien de Troyes*, Paris-Roma, Memini, 1997 (Bibliographie des Ecrivains Français 11))。この書誌はすでに古くなってしまったが、コーパスをめぐる議論については今も有効である。この書誌には当該ジャンルについての概説のほか、個々の物語を扱った研究のタイトルが収録されている。概説については、中世仏文学におけるアーサー王伝説を扱った論文集の中で、ダグラス・ケリーを中心とした研究者たちが執筆した章も参考になる(« Arthurian Verse Romance in the Twelfth and Thirteenth Centuries », *The Arthur of the French. The Arthurian Legend in Medieval French and Occitan Literature*, edited by Glyn S. BURGESS & Karen PRATT, Cardiff, University of Wales Press, 2005 (Arthurian Literature in the Middle Age IV), pp. 393-460)。

サー王の甥ゴーヴァン [英語名ガウェイン] となっています。ゴーヴァンは騎士団全員が目指すべき規範としての役割を果たしています<sup>5)</sup>。『双剣の騎士』の中で認められるのも、まさしくこうした状況なのです。

### 『双剣の騎士』の筋書き

今日のお話の焦点は、いささか個人的な関心に任せて剣のテーマに向けられることとなりますが、まずは『双剣の騎士』の筋書きをかいつまんで紹介してみましょう。筋書きは確かに複雑ではありますが、かなり厳密に仕上げられています。いくつかの箇所については、後ほどさらに詳しく取り上げることにします<sup>6)</sup>。物語は型通り、「聖霊降臨祭」に開かれたアーサー王宮廷の描写から始まります。そこへ「オンブルの彼方」のリス王が遣わした使者が突然姿を現します。リス王はその使者を介してブリタニア王アーサーに臣従の誓いを求め、その証拠にひげを送って寄越すよう命じ、それに応じない場合は容赦ない戦いを仕掛けると脅しつけます。当然アーサー王はこの要求をはねつけ、使者を送り返します。この間にリス王

---

5) この文学ジャンルを扱った最も網羅的な研究は、ベアータ・シュモルケ＝ハッセルマンの著作である (Beate Schmolke-Hasselmann, *Der Arthurische Versroman von Chrestien bis Froissart. Zur Geschichte einer Gattung*, Tübingen, Niemeyer, 1980 (Beihefte zur Zeitschrift für romanische Philologie 177))。この著作には英訳がある (*The Evolution of Arthurian Verse Romance: The Verse Tradition from Chrétien to Froissart*, transl. by Margaret and Roger MIDDLETON, Cambridge, Cambridge University Press, 1998 (Cambridge Studies in Medieval Literature))。ゴーヴァンについてはストイアン・アナタソフの著作 (Stoyan ATANASSOV, *L'Idole inconnue. Le personnage de Gauvain dans quelques romans du XIIIe siècle*, Orléans, Paradigme, 2000 (Medievalia 31)) のほか、キース・バズビーによる先駆的な著作 (Keith Busby, *Gauvain in old French Literature*, Amsterdam, Rodopi, 1980 (Faux Titre 2)) を参照。

6) 『双剣の騎士』の梗概については、ドイツ語版 (l'éd. Foerster, *op. cit.*, pp. XX-XXXII) と英語版 (l'introduction de Ivey, *op. cit.*, pp. 23-40) がある。フェルスターがドイツ語で作成した梗概の方が詳しく、その分量は 30 ページに及ぶ。

は、アーサー王の臣下にあたる「カラディガンの姫君」の町を征服し、それにより別の一連の事件を引き起こしていました。なぜならロールという名の「カラディガンの姫君」が、リス王に占領された町を奪還した後で、アーサー王宮廷にやってくることになるからです。ところでリス王は自らが先んじて恐るべき「荒廃した礼拝堂」へ出かけ、祭壇上のマリア像に自分の外套をかけて戻ってきていたのですが、その同じ礼拝堂へ馬銜を運び、リス王がマリア像にかけておいた外套の一部を証拠として持ち帰ることができるほどの勇気の持ち主がいれば、その人の願いを叶えてやると約束していました。この試練に挑む勇気があったのは、「カラディガンの姫君」だけでした。彼女は礼拝堂へ馬銜を運び、リス王がマリア像にかけた外套の一部を持ち帰ります。さらに、この点が重要なのですが、ロールは礼拝堂の一角に埋葬されたばかりの騎士から剣を奪います。その剣について彼女は、武勇の点で亡くなった騎士に匹敵する者を除けば、誰にもその剣を外すことができないという話を耳にします。そこでロールはこの剣を自分の脇につけたまま、アーサー王宮廷にやってきます。そして彼女が身につけた剣を外すことのできる騎士をアーサー王に求め、その騎士を夫に迎えると宣言します。宮廷に居合わせたすべての騎士が剣を外そうとしますが、失敗に終わります。とはいえ最良の騎士ゴーヴァンは不在でした。そこでゴーヴァンに仕える若き近習が、自らも剣の試練に挑戦できるよう、アーサー王に騎士叙任を求めます。アーサー王はその若者を騎士にし、武具を授けます。こうして武装を整えた若者が剣の試練に臨むと、全く意外なことに難なく剣を外してしまいます。その折にアーサー王の家令クウ〔英語名ケイ〕は若者に、「双剣の騎士」という異名を与えます。その後ずっと先で、若者は3本目の剣を手に入れます。ある泉の近くで若者が見つけたその剣は血で覆われており、どんなに拭ってみても血の流れを止めることはできませんでした。そこで若者はその剣を鞘に収めてから首

にかけ、旅を続けます（6338-6413行）。つまり「双剣の騎士」はこの時点で3本の剣を持っています。この3本目の剣の意味は、物語の結末近くになってようやく明らかになります。

若者は、物語のある時点で母の許へ戻り、亡くなった父が「荒廃した礼拝堂」に埋葬されたことを教えられます。その礼拝堂では何者かが亡き父から剣を持ち去っていました。ロールの脇から剣を外して以来自分の脇につけていた剣が亡き父の剣であったことを、若者はようやく理解します。母親の話によると若者にはまだ名前がなく、父の仇討ちを果たす日まで名前が明かされぬことになっていました。3本目の剣については、母の話によると、3ヶ月前から泉の近くに置かれており、剣に添えられた手紙には、剣を手にするのに値しない者が剣を奪おうとしたり、あるいは鞘から剣を抜こうとしたりするだけで、その日のうちに壮絶な死を遂げると記されていました。手紙にはさらに、剣の所有者になるのはただ1人の騎士であり、その人は己の名前を知らぬものの、将来王になる定めにあると記されていました。若者は母親の許にアーサー王から授けられた剣を残し、残り2本の剣、つまり父の剣と血にまみれた不思議な剣を携えて再び旅に出ます（7172-7233行）。血の滴る剣の謎と「双剣の騎士」の本名の謎は、別の泉の近くで明らかになります。その泉の近くでは、手負いの騎士が怪我の回復を待ちわびていました。伝えられた話によると、その怪我の回復には怪我を招いた剣がどうしても必要であり、しかもその剣はあらゆる称賛に値する名無しの若者が使わねばなりませんでした。当然のことながら、手負いの騎士を癒すのは「双剣の騎士」であり、相手の傷口に剣の先端で触れます。すると剣の刃に残っていた血が消え去ってメリヤドゥックの名が浮かび上がり、以後これが若者の名前になります（10647-10865行）。ゴーヴァンとメリヤドゥックが連れ立って宮廷へ戻ると、そこではロールがメリヤドゥックの帰りを待ちわびていました。宮廷では2人の

結婚が「聖霊降臨祭」の日に挙行されます。この結婚はそもそも、物語の冒頭でロールに約束されていたものでした。ロールとメリヤドゥックは子宝に恵まれ、亡くなる日までともに幸せに暮らしました。

### 「双剣の騎士」が持つ3本の剣

現在使われている物語のタイトルは、これを伝える唯一の写本の「<sup>エクスプリシット</sup>結びの言葉」によるものです。『双剣の騎士』を伝えるのはフランス国立図書館フランス語写本 12603 番ですが、この写本は他にもヴァース作『ブリュット物語』や [作者不詳の]『エネアス物語』、クレティアン・ド・トロワ作『イヴァン』だけでなく、数編のファブリオを含む数多くの短編作品も収録しています<sup>7)</sup>。写字生は赤インクで様々な作品の名前を慣例で、作品の冒頭や最後に記していました。そのため写本の第 71 葉裏に写字生は、

「『双剣の騎士』<sup>エクスプリシット</sup>終わる」

と記しており、これが現在タイトルとして使われているのです。

『双剣の騎士』が物語の本当のタイトルなのかどうかは分かりませんが、2人の主人公のうちの1人を選び、ゴーヴァンではなく、名無しの騎士に焦点を当てているところが光ります。これによく似たケースは、シャンティイ写本が収録するアーサー王物語の1つ『アンボー』です。シャ

---

7) この写本の詳細については、以下を参照 (Terry Nixon, « Catalogue of Manuscripts », *Les manuscrits de Chrétien de Troyes*, éd. par Keith Busby, Terry Nixon, Alison Stones et Lori Walters, Amsterdam-Atlanta GA, Rodopi, vol. II, 1993, pp. 69-70, Richard Trachsler « Le recueil PARIS, BN. fr. 12603 », *Cultura Neolatina*, LIV, 3-4 (1994), pp. 189-211 et Isabelle DELAGE-BÉLAND, « Incipit et mise en recueil : lire en contexte le *Chevalier aux deux épées*, texte initial du manuscrit Paris, BnF fr. 12603 », *Memini, travaux et documents*, 14 (2010), pp. 7-24)。

ンティイ写本の写字生は写本の欄外に赤インクで『ガンボー』と記しています [ガンボーはアンボーの異本]。つまり物語のタイトルは『ゴヴァン』でも『アンボーとゴヴァン』でもなく、『アンボー』なのです<sup>8)</sup>。『双剣の騎士』というタイトルはさらに、主人公の名を明かさず異名を示すにとどめており、その異名は物語の大半で主人公を指すために使われます。それでもこのタイトルは、主人公が実際には剣を2本だけでなく、3本持っていたという事実をいわば覆い隠しています。

3本の剣それぞれには、主人公が見せる成長過程の中での特定の段階が対応しています。主人公が見せる成長は、クレティアン・ド・トロワに始まる伝統に従って、主人公を待ち受ける運命と、恋愛および騎士道それぞれの理想的な段階へと向かわせます<sup>9)</sup>。アーサー王から若き近習へ授けられた最初の剣は、主人公が社会の一員となり騎士階級へ昇格したことを、もっと正確に言えばアーサー王騎士団への加入を表しています。それはいわば、若き主人公が辿る履歴にとって「絶対不可欠な」条件です。この条件を満たさなければ、主人公は己の運命を実現することはできません。2本目の剣は、主人公だけがロールの脇から外すことのできた剣であり、後に父親の剣と判明します。この剣はちょっと変わった形で、主人公が大人への領域へ入ったことを表しています。女性の脇につけられていた剣を

---

8) シャンティイ城図書館が所蔵するシャンティイ写本472番は、『アンボー』を収録する唯一の現存写本である。この写本については、『アンボー』の校訂本を刊行したウィンターズの指摘を参照 (*The Romance of Hunbaut: An Arthurian Poem of the Thirteenth Century*, ed. by Margaret E. Winters, E.J. Brill, Leiden, 1984, p. XI)。

9) 3本の剣と主人公の成長過程の3段階との対応については、コーベットの論考を参照 (Noel CORBETT, « Power and Worth in *The Knight of the Two Swords* », in : *Philologies Old and New : Essays in Honor of Peter Florian Dembowski*, edited by Joan Tasker Grimbert and Carol J. Chase, Princeton: Edward C. Armstrong Monographs, 2001 (Edward C. Armstrong monographs on medieval literature : 12), pp. 319-337, en particulier pp. 324-326)。

外すに至ることで、若者は剣と同時に将来の伴侶を獲得するからです。若者は試練に成功し、報償として姫君を手に入れます。それでもそう決めていたのはロールであるため、結婚の話はもともと剣とは無関係であり、いわば付け足しです。若者が試練に成功したのは、若者が剣の継承者であり、一方で父の仇討ちを果たさねばならなかった以上、いずれにしても剣の所有者が若者に定められていたからです。父の剣を手にしたとき主人公自身はいまだ知りませんでしたが、その剣が彼を自分の属する一族へと結びつけたのです。この剣は若者に過去と未来を与えています。過去を与えたのは剣がその所有者を一門へ加えたからであり、未来を与えたのは剣が一方で仇討ちという任務を命じているからです<sup>10)</sup>。その意味では、3本目の剣は2本目の剣と同じ機能を果たしているように思われます。そもそも、実の母親にも言い表すことができなかった名前を、主人公が自分で発見するだけのために、3つ目の試練を主人公に与えることに何の意味があるのでしょうか？ 明らかにここでは、筋書きの一貫性に関わる問題が出てきます。主人公が自分の一門を知っており、父の名前 [ブレエリス] を知っているのと同じく、主人公の一族も主人公の身許を知っています。そのため、剣の刃の上に刻まれ、主人公の名であると同時に祖父の名でもあるメリヤドゥックという名を作っている文字が、いかなる謎を解き明かしてくれるのが判然としません。この3つ目の試練については、衆目の前で2つ目の試練が明らかにした資質を、高度なレベルで裏づけるものだという説が出されています<sup>11)</sup>。それでもなお主人公の名については、一貫性を欠くという問題が残ります。主人公はいわば、己の出自と待ち受ける運命を2度も教えられているからです。剣を手にする者が将来王になることを

---

10) ATANASSOV, *L'Idole inconnue*, *op. cit.*, p. 104.

11) CORBETT, « Power and Worth », p. 325.

予告する、3本目の剣に添えられた手紙が伝える内容でさえも、2本目の剣の試練がすでに予告していたことを反復しているに過ぎません。「カラディガンの姫君」ロールの夫となることで、主人公はいずれにしても必然的に王になるからです。ここにはやはり問題があります。

事実、中世フランス文学には、思い違いでなければ「3本の剣を持った騎士」は1人も見つかりません。したがって3本目の剣は余分なものであり、卓越した力によってその運命がすでに重層的に決定されていた人物に、さらなる決定を重ねることになります。このことは、中世文学を一通り見渡し、名だたる騎士たちの生涯の中で剣が果たした役割を参照すれば、明らかになってきます。

### 「双剣の騎士」バラエン

中世フランス文学には事実、遍歴の最中に剣を発見する騎士が複数出てきます。その剣は一時的にあるいはその後もずっと、騎士たちの運命を変えることとなります<sup>12)</sup>。おそらく最も有名なケースはバラエンです。バラエンはメリヤドゥックと同じく「双剣の騎士」という異名を持ち、アーサー王文学の伝承ではメリヤドゥックよりもはるかに恵まれた存在となります。なぜならバラエンは「後期流布本サイクル」に登場し、そこから中世末期のフランスの紋章集へと移り、さらにはマロリーの中世英語版を介

---

12) ロックウェルは校訂本の「序」で、2本の剣を持った騎士たちの分析に数ページを割いている。そこで挙げられている類例のすべてが『双剣の騎士』の主人公に合致するわけではないように私には思われる。たとえば類例として挙げられている『エネアス物語』の主人公エネアスは2本の剣を同時に持っているのではなく、ディドーが自害するために彼の剣を使った後で、新たに1本の剣を手にしていただけである。この問題についてはロックウェル版『双剣の騎士』 pp. 5-7のほか、ロックウェルの雑誌論文も参照 (Paul Vincent ROCKWELL, « The Failed Embrace of the Father : Historical Continuity in *Le Chevalier as deus spees* and *Le Roman d'Eneas* », *Romance Quarterly*, 51:1 (2004), pp. 2-14)。

して英文学にも姿を見せるからです。

中世末期の紋章集によると、バラエンの話は次のように要約されています。

バラエンはバラアン兄弟の兄弟だった。バラエンは貧しい騎士だったが、同時代のいかなる騎士にもまして武勇に秀でていた。驚くほど背丈が高く、黒髪で、緑色の目は笑みをたたえ、褐色に近い顔色をしていた。鼻は少々大きく、はやしていたひげは伸びすぎていたわけではない。幅広の肩は見事で、腕は長くて筋肉質だった。彼の拳は同時代の他のどの騎士よりも大きく、角張っていた。(中略) 彼は当時いくつもの偉業を成し遂げたが、あんなにも早く死ぬことにならなければ、もっと多くの偉業を成し遂げたことだろう。彼は目立たぬように武勇を重ねていた。彼の腕はとても頑丈だったので、完全武装した騎士をつかんで馬上から投げ落とすことができるほどだった。丸腰のときにはごく普通の姿をしていたが、武具を手にすると実に獯猛に見えた。いつも2本の剣を持っていたので、2人の騎士から同時に戦いを挑まれても拒むことはなかっただろう。貴婦人たちと一緒にいるときには優しく愛想がよかったが、一緒にいることはほとんどなかった<sup>13)</sup>。

この記述は決してバラエンの「伝記」をまとめたものではありません。バラエンの「伝記」については、後ほどすぐに取り上げることにしますが、ここで注目しておきたいのは、中世末期に書かれたこの一節によると、2本の剣を持っていることが髪の色、背丈、あるいは筋肉質の腕と並

---

13) フランス国立図書館フランス語写本 12597 番第 15 葉表。バラエンの肖像を伝える全文と、アーサー王の騎士たちの紋章集についての解説については、拙著を参照 (Richard Trachsler, *Clôtures du Cycle Arthurien. Etude et Textes*, Genève, Droz, 1996 (Publications Romanes et Françaises CXXV), p. 507)。

んで、バラエンの肖像の一部になっていることです。さらには2本の剣についてはいわば、合理的な解釈がなされています。「2人の騎士から同時に戦いを挑まれても拒むことはなかっただろう」という一節は、2本の剣をこれ見よがしに携えていることが、あたかも1人ではなく2人の騎士を相手にいつでも臨戦態勢にあることをこれ見よがしに示しているかのようです。

それでも紋章集が収録するこの短い一節は、なぜバラエンが2本の剣を持っているのかについては触れていません。「双剣の騎士」という異名の由来を知るためには、紋章集の典拠にあたる『続メルラン物語』まで遡る必要があります。物語によると、剣を身につけた乙女は、次のように述べています。

「王様、このとおり私が脇に剣を身につけているのがお分かりのことと思います。だからと言って、私には鞘から剣を抜いたり、剣を体から外したりすることができないことをご承知おき下さい。事実、そうした特権は女の身には許されてはおらず、騎士にさえも許されてはいません。ただしこの国で最も素晴らしく、なおかつ最も信義に厚い騎士は別です。その信義の厚さは、いかなる偽善とも、いかなる悪巧みとも、いかなる裏切りとも無縁なものでなければなりません。そうした騎士だけが、この剣をつなぎ留めている結び目を解き、剣を己のものとし、この厄介な束縛から私を救うことができるのです。なぜなら、日夜こんなふうに着剣を身につけている限り、私は決して喜びも休息も味わうことができないからです<sup>14)</sup>。」

---

14) *Suite du Merlin*, éd. Roussineau, § 93, pp. 66-67. 現代仏語訳は *La Suite du Roman de Merlin*, trad. par Stéphane MARCOTTE, Paris, Champion, 2006, §93, pp. 198-199.

アーサー王はこの乙女に助力を約束し、最初に剣を外そうとして失敗します。そこで乙女はこう警告します。「ああ、王様、そんなに大きな力をかけてはなりません。この試練では力は何の役にも立たないからです。この冒険を終わらせる者は、そんなにたいした苦勞はしないのです<sup>15)</sup>。」アーサー王は、試練に成功する者があらかじめ定められた冒険であることを理解していなかったのです。逆に言えば、力や敏捷さを頼りにして、からまった結び目を解いたり、挟まって動かなくなった剣を鞘から引き抜いたりするための方法を手際よく見つける必要があるような、器用さのみが求められる試練ではなかったということです。

アーサー王に続いて、貴族たちが剣を外そうとし、さらには宮廷に集う騎士たちも試練に挑みます。ただ1人、ノーサンバランド出身の貧しい騎士だけは試練に挑んでいませんでした。その騎士は自国から追放され、しばらく前にローグル王国へやってきていました。自分の宮廷ではお役に立てないと述べて、アーサー王が乙女を送り返そうとしたまさにそのとき、ノーサンバランド出身の騎士が、泣きながら悲しむ乙女のの前に向かい、試練への挑戦を申し出ます。騎士があまりにも滑稽でつましい身なりをしていたため乙女は、彼よりも遅い多くの騎士が失敗に終わったこの試練に彼が成功するはずはないと、そっけなく答えます。傷心の騎士は乙女に、外見だけで彼のことを判断するのは間違いであり、自分もかつてははるかに富裕の身だったと反論します。

そこで騎士は剣の帯革をつかみ、両手を結び目に置き、瞬く間にそれを解くと、剣を自分の方へ引き寄せる。それから乙女にこう言った。「すっかり束縛から解放されたのですから、お好きなときに出かけて下さって構いません。それでも剣は私に残して下さい。私が勝ち取っ

---

15) *Suite du Merlin*, éd. Roussineau, §93, pp. 66-67.

たと思うからです<sup>16)</sup>。」

騎士が試練に成功し、宮廷の中で最良の騎士であることを証明したことについては、乙女も賛成します。しかし彼が剣を所有することには反対します。実際にはそう定められてはいなかったからです。騎士が剣をどうしても返そうとしなかったため、乙女は騎士に不連続きの境遇が待ち受けていると告げ、なかでも不吉な予言として、彼がこの世で最愛の人をその剣で殺め、彼自身も年末を待たずに亡くなると述べます。名無しの騎士は肩をすくめて、宮廷を離れる決意を固め、馬を求めます。宮廷では明らかに、騎士の美德よりも富が重んじられていると考えたからです。そればかりか出立前に騎士は、事態をさらに悪化させてしまいます。アーサー王の御前に、ある乙女 [王にエクスカリバーを届けたことのある乙女] がやってきて、この騎士の首を要求したのですが、逆に騎士の方が乙女の首をはねてしまったからです。かつて騎士の兄弟がこの乙女から毒をもらっていたからです。この若き騎士の本名はバラエンでした。彼がこのような暴挙に出たため、アーサーは宮廷からバラエンを追放します。そこでバラエンはアーサー王国を後にし、馬上の人となって己を待ち受ける運命に向けて出立します。その運命は、剣を身につけていた乙女の予言通り、実に忌まわしいものでした。それはバラエンがこの世で最愛の兄弟 [バラアン] を殺め、自らも兄弟から受けた怪我で亡くなるという運命です。さらにバラエンはその前に「危険な宮殿」へ向かい、いとも聖なる人物ペルアン王に「苦しみの一撃」を与えることで、リスティノワ王国を「聖杯物語群」に馴染みの「荒地」へと変貌させることにもなります。

「双剣の騎士」という異名については、物語は騎士がアーサー王宮廷を

---

16) *Suite du Merlin*, éd. Roussineau, §96, p. 69. 現代仏語訳は *La Suite du Roman de Merlin*, trad. par Stéphane MARCOTTE, Paris, Champion, 2006, §96, p. 202.

離れる時点で、次のように説明しています。

そこで騎士は、2本の剣を携えてその場を離れた。それ以来、生ある限りその2本の剣を持っていたため、彼は最初の名前を失ったのである。以前は「野人バラエン」と呼ばれていたからである。(中略)バラエンは逆に、その時から自分の名を失い、持っていた2本の剣のせいで、もはやバラエンとは呼ばれず、誰もが彼を「双剣の騎士」と呼び、いたるところでその名前により知られていた<sup>17)</sup>。

### バラエンとメリヤドゥック

研究者たちは、『続メルラン物語』と『双剣の騎士』の類似点を正しく指摘してきました。2人の主人公の異名のほか、帯革および剣の試練や、副次的に出てくるリス王（またはリヨン王）の存在も類似点として挙げられてきました。リス王は神話的な来歴を持つ謎めいた人物であり、2つの物語では明らかにアーサー王とその宮廷にとって競合関係にあります。2つの物語には相違点もありますが、これについてはあまり注目されてきませんでした。相違点は少なくとも3点挙げることができます。

『双剣の騎士』によると、アーサー王宮廷にやってきた乙女は、夫探しという実にはっきりとした嘆願を携えていました。乙女から内容が明かされぬまま願い事を述べられたアーサー王は、その「強制的贈与」に同意してしまいます。

「王様は、私に約束して下さった贈与がいかなるものかご存知ありま

---

17) *Suite du Merlin*, éd. Roussineau, §104, p. 75. 現代仏語訳は *La Suite du Roman de Merlin*, trad. par Stéphane MARCOTTE, Paris, Champion, 2006, §104, pp. 211-212.

せん。ですからそれをお知らせしたいと思います。王様には、夫となる者を私に授けていただきたいのです。その人には、帯革を切り裂くことなく、私が身につけているこの剣を何ら壊すことなく外せる力がなければなりません。帯革は腐ったり古くなったりしているわけではありません。私を手にするができる人は、大変な幸せ者だと思えることでしょう。私が王と王妃の娘であることを、とくにご承知おき下さい。両親は亡くなっていますので、王国全体を支配する後継者は、私の他にはおりません。それに私よりも富裕で美しい者を見つけようと思えば、はるか遠くまで探しに行かねばならないことでしょう<sup>18)</sup>。」

したがってこの試練の目的は、『続メルラン物語』のように決して救世主探しではなく、夫探しなのです。『双剣の騎士』に出てくる「カラディガンの姫君」ロールは、彼女の領国へ侵攻し占領していたリス王を独力で立ち退かせることに成功していました。そのため自分の地位に相応しい立派な男を探しにきたのです。思い出していただきたいのですが、剣を身につけていたのは、そもそも彼女でした。これに対して『続メルラン物語』では、乙女が剣を身につけることになった理由が明らかにされてはいません。乙女は明らかにこうした境遇を耐え忍んでいたのであり、自分でそうした状況を選んだわけではありません。

2つ目の相違点は逆説的ながら、最も明瞭で誰もが納得してきた名前の問題に関わるものです。『双剣の騎士』では、名無しの若者が徐々に己の名声を高め、その成長過程の果てに異名から本名の獲得に至っています。これに対して『続メルラン物語』で語られるのは、まさしく逆のプロセスです。バラエンという固有名詞が失われ、「双剣の騎士」という異名が定

---

18) *Le Chevalier aux deux épées*, trad. DE CARNÉ, *op. cit.*, p. 54.

着するからです<sup>19)</sup>。

3つ目の相違点は、剣の由来とその運命に関わるものです。試練に成功したとき、後にメリヤドゥックと判明する若者は、異論の余地なく剣の所有者になります。これに対して『続メルラン物語』では、逆のことが明らかになります。この問題については、後ほど触れることにします。

2作品の創作年代を確定するための手がかりは作品以外に全く残されていないため、以上3つの相違点は、研究者それぞれの見方や、説が発表された時期により、正反対に解釈されてきました。一方では『双剣の騎士』の作者が皮肉をこめて『続メルラン物語』のテーマを反復した考え、他方では逆に長編作品である『続メルラン物語』の作者が『双剣の騎士』を補足的に取り込もうとしたと考えました。このような形で問いを立てても答えは見つかりませんが、別の角度から問題に迫ることはできます。

たとえば2つの物語には、様々な相違点を越えたところに共通点を認めることができます。明らかに2つの作品では、剣は個人的な武器です。『双剣の騎士』では、剣は正当な所有者の手に渡ります。なぜならメリヤドゥックは自分では知らぬまま、父の剣を手に入れているからです。これに対して『続メルラン物語』では明らかに、結び目を解くことのできた者が剣を手にするにはなっていません。バラエンは剣の試練に成功した後で、不当にも剣を要求しますが、まさしくこの暴挙ゆえにバラエンは一連の「不運」により罰せられ、それが自らの身に及び、死を招くことになるのです<sup>20)</sup>。言い換えれば、試練の成功は剣の所有とは切り離されており、

19) これらの相違点はエレヌ・ブージェが指摘している (Helène BOUGET, « *Li Chevalier as deus espees ; la fabrique ratée d'un personnage ?* » in : *Façonner son personnage au Moyen-Âge : actes du 31e colloque du CUERMA*, 9,10 et 11 mars 2006, études réunies par Chantal CONNOCHIE-BOURGNE, Aix-en-Provence, Publ. de l'Université de Provence, 2007 (Senefiance, 53), pp. 77-86, en particulier p. 79)。

20) Carlo Donà, « Perceval e il dono della spada », *Vincolare, ricambiare, dominare*

剣は贈与の領域に属しています。こうした贈与は、戦いで相手から剣を奪い取ることから、父から息子への剣の遺贈に至るまで、様々な形式を取る可能性があります。それでもこうした贈与は常に、剣を手にする者と問題の剣との間に、いわば摂理によるつながりがあるという考え方に基づいています。したがって、2作品の類似はおそらく、テキスト間の借用によるものではなく、一方が他方を参考にしているのでもなく、2作品がそれぞれに来歴のより古いモデルを参考にした結果なのです。つまり「間テキスト性」ではなく、「間文化性」が問題になっています。騎士道社会では、剣が中心的な位置を占めていたため、2つの作品は中世期によく知られていた1つの文化現象を異なる形で表現したのです。カロリング朝時代[751-987年]には、馬1頭分に匹敵する価値のせいで社会のエリート層にしか持てなかった剣は、中世盛期[11-13世紀]になると我々の携帯電話に等しいものになりました。剣は道具であると同時に、シンボルでもありました<sup>21)</sup>。

---

: *il dono come pratica sociale e tema letterario : atti del X convegno internazionale, Rocca Grimalda, 23-25 settembre 2005*, a cura di Nicolò Pasero e Sonia Maura Barillari, (L'immagine riflessa. Quaderni. Serie miscellanea;10), pp. 63-90, p. 66.

- 21) ここではカルロ・ドナが用いた見事なメタファーを使わせていただいた (Carlo Donà, « La Spada nella Rocca e altre spade del destino », *Filologia e letteratura : studi offerti a Carmelo Zilli*, a cura di Angelo Chielli e Leonardo Terzusi, Bari, Cacucci editore, ©2014 (Biblioteca della tradizione classica ; 10), pp. 63-80, p. 62)。この論考には、剣の物質的および象徴的な側面に関する研究を網羅した書誌も含まれている (特に p.63, note 2 et 3)。剣の値段については、同じ論考の p. 65, note 4 に言及があり、フランコ・カルディーニのデータが使われている。カルロ・ドナによる次の論考も参考になる (Carlo Donà, « La spada del re », *Metafora medievale. Il « Libro degli amici » di Mario Mancini*, a cura di Carlo Donà, Marco Infurna e Francesco Zambon, Roma : Carocci, 2011 (Biblioteca medievale. Saggi 29), pp. 94-120)。この論考は数多くの資料を用いているだけでなく、複雑なデータを分かりやすく提示している点でも定評がある。剣をめぐる鋭い考察は、ウォーレンの著作の序にも見つかる (Michelle R. Warren, *History on the Edge : Excalibur and the Borders of Britain, 1100-1300*, Minneapolis, Univ. Of Minnesota Press, 2000, pp. 16-22)。

中世文学は、模範的な騎士たちの運命を同じく模範的な剣の運命と結びつける物語を、絶えず生み出してきました。こうした物語はいずれも、騎士とその剣を結ぶ強いきずなに重きを置く、一定数の決まった要素を軸に展開しています。したがって中世の物語世界の剣は、『スター・ウォーズ』でジェダイ [銀河系の自由と正義の守護者] が使うライトサーベルよりも、ハリー・ポッターが使う魔法の杖に近いのです。ライトサーベルは現代のねじまわしと同じく交換可能で特定の個人とは無関係なのに対し、ハリー・ポッターの杖は十分に機能するために、持ち主の性質と合致する魂のようなものを備えているからです。

### 英雄と剣を結ぶきずな

騎士たちにとってこうした剣が持つ重要性はとりわけ、剣に名がつけられるようになったことから分かります。『ニーベルンゲンの歌』や『シーズレクのサガ』に登場するゲルマンの名だたる勇士たちはみなそれぞれ、「バルムンク」、「ナーゲルリンク」、「ミムンク」、「エッケザックス」という名がついた個人的な剣を持っています。こうした勇士たちと同じく、中世フランスの武勲詩に登場する名だたる叙事的な英雄たちが手にする剣にも徐々に、意味がはっきり分かることの多い名がつけられるようになっていきました。シャルルマーニュ [カール大帝] は「ジョワイユーズ (喜ばしい)」という名の剣を持ち、ドーン・ド・マイヤンスの剣は「メルヴェイユーズ (驚異的な)」と呼ばれ、異教徒バリガンの剣は「プレスイユーズ (貴重な)」、オティネルの剣は「クルスーズ (怒った)」、ジラルド・ド・ルシヨンの剣は「ベル (美しい)」（または「ベラン」)、オジエ・ル・ダノワ [デーン人オジエ] は『サン＝ミラン覚書』 [サン＝ミランの修道院で発見された 11 世紀末の文書] 以来、「コルト (短い)」（または「コルテーヌ」) という剣の所有者とされています<sup>22)</sup>。オリヴィエの剣は「オー

トクレール（いとも清らかな）」または「タリヤブリーマ（最初に切りかかる）」、ユーグ・カペーの剣は「コンスタンス（不変、粘り強さ）」と呼ばれています。このように勇者の剣をリストアップすれば、かなり長いものとなります<sup>23)</sup>。叙事詩以外のジャンルでは、名前のついた剣が出てくるのはまれであり、[ジェルベール・ド・モントルイユ作]『スミレ物語』には「フィースゲール（戦いを終わらせる）」[主人公がサラセン戦士から奪う剣]しか見つかりません。また当然のことながらアーサー王伝承では、少なくとも[ジェフリー・オヴ・モンマス作]『ブリタニア列王史』（1138年）以降、エクスカリバーがアーサーの個人の剣として出てきます（『ブリタニア列王史』では剣はカリブルヌスというラテン語名で呼ばれています）。事実、円卓の物語では普通、剣は固有名を与えられるよりも、形容

---

22) クルテースについては、ベックマンの論考を参照（Gustav Adolf Beckmann, « Oggero Spatacurta und Ogier le Danois. Zur Komplexität einer epischen Tradition », *Zeitschrift für romanische Philologie*, 120, 2004, pp. 421-456）。

23) 名剣のリストについては、ロルフスの論考（Gerhard Rohlfs, « Was bedeutet der Schwertname Durendal ? », *Archiv für das Studium der neueren Sprachen*, 169 (1936), pp. 57-64) の p. 62 のほか、アンドレ・モワザンの固有名詞事典（André MOISAN, *Répertoire des noms propres de personnes et de lieux cités dans les chansons de geste françaises et les œuvres étrangères dérivées*, Genève, Droz, 5 vol., 1986 (Publications Romanes et Françaises CLXXIII)）を参照。フランスでは『ロランの歌』まで遡りうる、剣に名づけを行う流行の起源をめぐる問題については、リタ・ルジュースの論考を参照（Rita Lejeune, « Les noms d'épée dans la *Chanson de Roland* », *Mélanges Mario Roques*, Paris, Librairie Marcel Didier, 1951, t. I, pp. 149-66）。ゲルマンの伝承に代わってアラビア起源を想定する説も提唱されている（Alvaro Galmés de Fuentes, « Les numes d'Almace et cels de Durendal ( « Chanson de Roland », v. 2143). Probable origen árabe del nombre de las dos famosas espadas », *Studia Hispanica in honorem R. Lapesa*, Madrid, Gredos- Catedra-Seminario Menedez Pidal, 1972, 1, pp. 229-241）。『ロランの剣』の中に複数の剣が同時に出てくることについては、ヴェンスの論考も参照（Eugene Vance, « Three Epic Swords and the Stories They Tell », *Approaches to teaching the Song of Roland*, edited by William W. Kibler and Leslie Zarker Morgan, New York : Modern Language Association of America, 2006, pp. 246-252）。

語を伴って出てきます。例えば「不思議な帯革の剣」、「冒険の剣」、「折れた剣」といった具合です<sup>24)</sup>。

ここで問題となっているのは単なる「文学現象」ではなく、「文化現象」であることに注意しなければなりません。剣への関心は、おそらく剣全般にあてはまるはずですが、中世期全体にわたって感じ取ることができます。たとえばロランの有名な剣デュランダルのケースが想起されます。デュランダルは中世期全体にわたってロカマドゥール〔フランス中央山地西麓の村〕で崇敬の対象となり、今日でも「黒マリアの礼拝堂」に聖遺物として保管されています。全く別のジャンルであれば、おそらく知名度は劣りますが、聖ガルガーノのケースが想起されます。12世紀のトスカナ地方出身の騎士ガルガーノは、隠者になる決意を固めると、十字架をこしらえる素材がなかったため、己の剣を岩の中へ打ち込みます<sup>25)</sup>。剣はいまも同じ場所にあり、崇敬の対象であり続けてきました。剣の中で最も有名なエクスカリバーについては、今日では何の痕跡もなく偽物さえ見つか

---

24) ウェストによる2冊の固有名詞事典 (G. D. WEST, *An Index of Proper Names in Arthurian Verse Romances, 1150-1300*, Toronto, Toronto University Press, 1969 (University of Toronto Romance Series 15) ; *An Index of Proper Names in Arthurian Prose Romances*, Toronto, Toronto University Press, 1978 (University of Toronto Romance Series 35)) のうち「剣」(Espee) の項目を参照。「不思議な帯革の剣」については、韻文物語群では複数の異本が見つかる。

25) 聖ガルガーノと彼の剣が刺さった場所については、トスカナ地方における聖ガルガーノ信仰とモンテシエーピのシトー派大修道院をめぐる様々な側面を扱った、大部な会議議事録 (*La spada nella roccia: San Galgano e l'epopea eremitica di Montesiepi*, a cura di Anna Benvenuti, Convegno di studi "La spada nella roccia: San Galgano e l'epopea eremitica di Montesiepi", Firenze, Mandragora, 2004) を参照。なお伝説の古い複数の版によると、隠者が十字架を作るための道具を持っていなかったため、剣を岩へ突き刺して十字架代わりにしたのだという (Rudolph Arbesmann, « The three earliest Vitae of Saint Galganus », in *Didascalie. Studies in honor of Anselm Maria Albareda ...* Presented by a group of American scholars, edited by Sesto Prete, New York : Bernard M. Rosenthal, [1961], pp. 1-37, p. 14)。

ませんが、この剣として例外ではありません。なぜならエクスカリバーも名聲に包まれたまま、中世期には持ち主を変えていたからです。たとえばリチャード獅子心王〔イングランド王、1157-1199年〕は、第3回十字軍〔1189-1192年〕のとき、政治上の支援と移動に必要な複数の船と交換する形で、エクスカリバーをシチリア王タンクレッド〔1139-1194年〕に贈っています<sup>26)</sup>。中世期全体にわたって、このように実在した剣はしたがって、イデオロギーや宗教あるいは政治に関わる意味を持っていたのです。こうした剣がこれほどに名高いのは当然のことながら、所有者が並外れた人たちだったからです。名剣は所有者にとって極めて個人的なものでした。

#### ペルスヴァルに運命づけられた剣

『双剣の騎士』の作者が大いに利用した『グラアルの物語』は、剣にまつわるこうした側面を明らかにするのに、うってつけの類例を提供してくれます<sup>27)</sup>。思い出していただきたいのですが、ペルスヴァルは「グラアル

---

26) こうした史実に関する若干の資料と、剣の政治利用については、ブレスクの論考 (Henri BRESQ, « Excalibur en Sicile », *Medievalia*, 7 (1987), pp. 7-21) および、エドアルド・ダンジェロの論考 (Edoardo D'ANGELO, « Re Artù ed Excalibur dalla Britannia romana all Sicilia normanna », *Atene e Roma*, 1 (2007), pp. 137-158, en particulier pp. 152-158) を参照。さらにエクスカリバーおよびアーサー神話の政治利用については、ショウーによる指摘を参照 (Amaury CHAUOU, *L'idéologie Plantagenêt. Royauté arthurienne et monarchie politique dans l'espace Plantagenêt (XIIe-XIIIe siècles)*, Rennes, PUR, 2001 (collection "Histoire"), pp. 254-257)。

27) 『双剣の騎士』が『グラアルの物語』に多くを負っていることは、中世仏文学研究の草創期から指摘されてきた。この2作品の詳細な書誌と、2作品の的確な比較検討については、カルロ・ドナの論考を参照 (Carlo Donà, « Da Perceval a Mériadec: la storia del cavaliere dalle due spade », *Chrétien de Troyes et la tradition du roman arthurien en vers*, éd. par Annie COMBES, Patrizia SERRA, Richard TRACHSLER & Maurizio VIRDIS, Paris, Garnier, 2013 (Rencontres 58. Secteur Moyen Age. Civilisation Médiévale 6), pp. 243-269)。2作品に

の城」で、漁夫王から1本の剣を授けられます<sup>28)</sup>。ペルスヴァルはいまだ自分が何者であるのかも、城主との間にどのような姻戚関係があるのかも知りませんでした〔漁夫王とペルスヴァルは従兄弟どうしの間柄〕。この時点で物語は、剣がペルスヴァルのものとなるよう「運命づけられていた」(3168行)とはっきり述べています。その剣が新品で、まだ一度も使われたことがないことを、ペルスヴァルは後に従姉から教えられます。従姉はさらに、剣は必ず折れてしまうため、不思議な鍛冶師トレビュシエによって鍛え直してもらうことになると言い添えます。トレビュシエは自分の名を剣の刃に刻んでいましたが、こうした慣例はそもそも紀元千年以前から西欧で剣を鍛えるときに行われていました。『グラアルの物語』の続編の1つ、マネシエ作『第3続編』によるとこの他にも、トレビュシエは歩行が困難であること、ペルスヴァルに渡された剣の他にも2本の剣を鍛えていたこと、ペルスヴァルの剣を鍛え直すにはトレビュシエが自分の命を犠牲にしなければならないことが分かります。したがってトレビュシエは明らかに、ゲルマン神話のヴィーラントが代表する、神話的な鍛冶師の1人なのです<sup>29)</sup>。

---

出てくる剣については、カルロ・ドナの綿密で見事な前掲論文を参照 (Donà, « Perceval e il dono della spada », *op. cit.*)。

- 28) この一節についてこれまで行われてきた解釈は、想像以上に少ない。たとえばフィリップ・メナールの論考を参照 (Philippe Ménard, « Enigmes et mystères dans le Conte du Graal » dans *De Chrétien de Troyes au Tristan en prose : études sur les romans de la Table Ronde*, Genève, Droz, 1999 (Publications romanes et françaises 224), pp. 73-94, en particulier pp. 77-78)。
- 29) 鍛冶師トレビュシエについては、クロード・ルクトゥ教授献呈論文集 (*Formes et difformités médiévales : hommage à Claude Lecouteux*, Paris, Presses Universitaires de Paris-Sorbonne, 2010) に掲載された渡邊浩司の論考 (Kôji Watanabe, « Trébuchet, Wieland et Reginn. Notes sur le forgeron mythique dans la tradition indo-européenne », pp. 233-243) とフィリップ・ヴァルテールの論考 (« Galant le forgeron dans *La Suite du Roman de Merlin* », pp. 223-231) を参照。この2つの論文には書誌が含まれている。ヴィーラントについては、

今日のテーマとの関連では、この神話上の剣が昔から変わらず、ペルスヴァルの一族のものであったことに注意しなければなりません。明らかにこの剣は使われていません。そうでなければ、新品ではなくなっていたはずです。つまり剣はある継承者から別の継承者へと引き継がれていたのです。そのため漁夫王は、将来「グラアル」の英雄となるペルスヴァルに剣を渡したのです。さらに注目すべきは、漁夫王がペルスヴァルの脇に剣をつけるのではなく、手渡ししていることです。ペルスヴァルは自分で剣を腰につけ、それから試しに鞘から剣を抜いています。

それから彼は鞘から剣を抜き放った。

そしてしばらくの間、刀身を手にした後、

再び鞘の中に収めた。

その剣が騎士の腰にも、なおまたその拳にも

ぴったりだったことをご承知おき下さい<sup>30)</sup>。

引き抜いた剣を鞘に戻すと、ペルスヴァルは剣を近習の1人に渡し、預かってもらいます。したがってこの剣は使われることがなく、漁夫王は姪を介してペルスヴァルに剣を託しているだけなのです。重要なのはペルスヴァルがこの剣を所有していることであり、ペルスヴァルは剣の継承者なのです<sup>31)</sup>。

---

バックマンの最近の著作を参照 (Gustav Adolf Beckmann, unter Mitarbeit von Erika Timm, *Wieland der Schmied in neuer Perspektive. Romanistische Fakten und germanistische Folgerungen*, Frankfurt am Main, Peter Lang Verlag, 2004)。

30) 『グラアルの物語』からの引用は、バズビー版による (*Chrétien de Troyes. Le Roman de Perceval ou le Conte du Graal*, éd. par Keith BUSBY, Tübingen, Niemeyer, 1993, vv. 3173-3177)。

31) Donà, « Perceval e il dono della spada », *op. cit.*, p. 84. この点については、渡邊の前掲論文でも指摘されている (Watanabe, « Trébuchet, Wieland et

さらに注目されるのは、この剣の辿る運命がいくつかの点で、ペルスヴァル自身の運命に似ていることです。ペルスヴァルが「グラアルの城」で試練に失敗することになっているのと同じく、剣はペルスヴァルが戦いで使えば折れることになっています。そもそも剣には「姉妹」にあたる2本の剣がありますが、これと同じくペルスヴァルにも2人の兄がいました。また亡き父はトレビュシエのように歩行が困難でした。したがってペルスヴァルの剣はありきたりの剣にすぎないのではなく、その所有者と完全な対応関係にあるのです。剣は所有者の一部であるため、両者の関係は<sup>メトニミー</sup>換喩 [「赤頭巾」のように隣接性に基づく比喩] よりも<sup>シネクドック</sup>提喩 [全体で部分、またはその逆を表す比喩] の領域にあると言えるでしょう<sup>32)</sup>。剣は所有者の一部、つまり戦士の恐るべき延長部分にあたります。

類例として引き合いに出すことができるのは、ケルトの偉大な戦士クー・フリンの最期を伝える有名なエピソードです [アイルランドの「アルスター物語群」に属する『クー・フリンの最期』による]。クー・フリンは数の点で勝る敵軍を相手に孤軍奮闘していました。魔法にかけられて力が衰えたクー・フリンは、敵軍を相手に立ったまま死ぬるように、自分の体を石に縛りつけます。こんな状態にあってもクー・フリンの凶暴さは消えず、1羽のカラスが彼の肩に止まったときになって初めて敵軍は彼の死を確信し、あえて彼に近づくのです。敵軍の首領ルギドがクー・フリンに近づき、その首を刎ねます。するとクー・フリンの体は不思議な光で輝き始め、同時にクー・フリンの剣が手から落下して、ルギドの片手を切り落とします。超自然的な光は、亡くなったクー・フリンの右手を敵軍が切

---

Reginn », *op. cit.*, p. 234)。ペルスヴァルがこの剣を身につけるのはずっと先のことである。従姉がペルスヴァルに出会ったとき、彼の脇に剣を見つけているからである (vv. 3653-3657)。

32) この指摘はウォーレンの著作 (WARREN, *History on the Edge, op. cit.*) に記されている。

り落とすまで輝き続けます [この話に着想を得た瀕死のクー・フリンの像がダブリン中央郵便局のホールにある。このブロンズ像はオリヴァー・シェパードの作品である]。

まるで剣に固有の命が宿っているかのごとくであり、その所有者と一緒に亡くなる前に、死を越えたところで剣は所有者の仇討ちを行っていません。他にも呪われた剣や悪しき剣とよばれる剣もあり、それらは鞘から抜かれるとすぐに血を飲み干し、あるいは血の中に浸して冷やさねばならぬ類のものです。さらには、生命を持った剣というのも出てきます<sup>33)</sup>。

### ロランの剣デュランダル

そのためこうした剣は、重要な継承者や受遺者がいない場合には、所有者とともに亡くなる定めにあるのです。歴史的に見ても戦士たちは使っていた剣とともに埋葬されており、中世フランスの物語群でもこうした状況では、剣を隠したり破壊したりしています<sup>34)</sup>。こうした例の来歴ははるか古いため、物語に登場する例を越えて、様々な文化現象まで遡ることができます。『ロランの歌』では、自らの死が近いことを悟ったロランが、彼の剣デュランダルを折ろうと試みる場面が想起されます。それでも、石の塊に叩きつけて剣を折ろうとするロランの試みは失敗に終わり、剣はきしむものの折れることはありません。ロランが振り下ろすたびに剣は、明るく輝いたまま、空へ向かって跳ね上がります。そこでロランはデュランダルに、生き物を相手にしているかのごとくに別れの言葉を述べ、この剣のおかげで成し遂げることでできた偉業をすべて数え上げます。ロランはまた、デュランダルに備わる宗教的な価値も強調しています。黄金の柄頭には、極めて貴重な聖遺物がいくつも納められていたのです [柄頭には聖

33) Donà, « La Spada nella Rocca », p. 71.

34) Donà, « Perceval e il dono della spada », *op. cit.*, p. 84.

ペテロの齒、聖バジールの血、聖ドニの髪、聖女マリアの布が納められていた]。

ロラン亡き後にデュランダルを待ち受ける運命については、ロラン自らが次のようにはっきりと述べています。

異教徒らがそなたを我がものにするのは不当だ。

そなたはキリスト教徒の手で使われねばならぬ。

願わくば、卑劣者の手に渡ることなかれ！<sup>35)</sup>

それでもデュランダルを折ることができぬと悟ったロランは、これを自分とともに、体の下にいわば「埋葬」することにします。ロランは体の下に己の剣デュランダルと角笛オリファンを隠し、うつ伏せに横たわります。フランク族の戦士たちが亡くなった戦場へ辿り着いたとき、シャルルマーニュはロランをこうした姿勢のまま見つけます。皇帝に護衛兵として仕えたロランは、皇帝の甥でした。かつてロランに託した剣を、シャルルマーニュは結果的にこのような形で取り戻しており、円環が閉じられることになるのです。

ここではオックスフォード写本に基づいて紹介しましたが、重要なのはデュランダルの運命をめぐる伝承が、後に膨れ上がっていったロラン伝承の中で様々なバリエーションを生み出したことです。いくつかの作品によると、ロランはデュランダルをある川や他の川へ投げ込み、それを見つけたフランク族の1人の戦士がシャルルマーニュの許へ届けています。ま

---

35) 『ロランの歌』からの引用は、ショート版による (*La Chanson de Roland*, éd. par Ian SHORT, Paris, Librairie générale française, 1990 (Le Livre de Poche, Lettres gothiques), vv. 2349-2351)。ロランがデュランダルを折ろうと何度も試みる場面は、オックスフォード写本が伝える有名な 171-173 節に見つかり、これまで多くの解釈がなされた。

た別の作品では、皇帝自身が剣を見つけ、川の中に投げ入れています。いくつかのバージョンに見られるように、伯父に剣を返すことができるよう、ロランが生き返るケースまで出てきます。『スペイン入国記』[イタリア語による年代記の1つ]によると、ロランはここでも「死後に」、シャルルマーニュの助けを借りて、剣をオリヴィエの息子ガレアントに渡しています<sup>36)</sup>。こうした様々なバージョンはどれも、同じ1つの問題を表現しています。それは英雄が亡くなれば、剣とその所有者が離れ離れになるという問題です。人間の運命が剣と密接に絡み合い、剣もまたその所有者と密接に結びついている以上、どちらかが欠けた状況を想像するのは困難なのです。

#### アーサー王の剣エクスカリバー

最も象徴的なケースはもちろん、アーサーの剣エクスカリバーのケースです。エクスカリバーは、アーサーが瀕死の状態にあったとき、湖へ投げ込まれます。このテーマはインド＝ヨーロッパ語族の伝承全体に見つかります<sup>37)</sup>。エクスカリバーのケースでは、この超自然的な剣を破壊するのではなく、継承者がいないために剣を戻すべき領域へ返すことが問題となっ

36) Giovanni Palumbo, « Le eterne fortune dell'eroe Orlando. Armi, cavalleria e amore nella tradizione della *Chanson de Roland* », *La letteratura cavalleresca dalle Chansons de geste alla Gerusalemme liberata : atti del II Convegno internazionale di studi, Certaldo Alto, 21-23 giugno 2007*, a cura di Michelangelo Picone, Pisa, Pacini, c2008, pp. 9-24. この論考中、デュランダルが出てくる作品群への言及や、さらに詳細な解釈は pp. 22-23 に見つかる。

37) 湖へ投げ込まれる剣のモチーフについては、ジョエル・グリスヴァルドによる古典的な論考 (Joël Grisvard, «Le motif de l'épée jetée au lac: La mort d'Arthur et la mort de Batradz», *Romania* 90 (1969), pp. 289-340 et 473-514) のほか、クルト・ヴァイスの論考 (Kurt Wais, «Über themengeschichtliche Zusammenhänge des versenkten Schwertes von Roland, Arthur, Starkad und anderen», *Germanisch-Romanische Monatsschrift* 26 (1976), pp. 25-53) を参照。

ています。そのため、フランス語散文による『アーサー王の死』[1230年頃]は、ジルフレによって湖に投げ込まれた剣が、ただ単に湖の底へ消え去ったのではなく、剣が本来の場所へ戻ったことをわざわざ明示しています。その証拠に湖水から出てきた手は、剣を空へ向けて振りかざします<sup>38)</sup>。次の所有者が現れるまで、超自然的な領域がこの剣をしっかりと保管するのです。次の所有者は、アヴァロン滞在を経て怪我が治りいつの日か戻ってくるアーサーなのかかもしれません。あるいは、この剣を託すことのできる別の若き英雄なのかかもしれません。

このような超自然的な剣の継承が、理想上のものであれ生物学上のものであれ、いずれにしてもイデオロギーと関連した一門のつながりを常に前提としていることは、先にペルスヴァルと、彼が漁夫王の姪を介して受け取る剣の例から確認した通りです。そのため中世文学には、剣の由来とその後の運命を語る「剣の話」というトポスが生まれ、ときに意外な形で剣の継承が描かれています。たとえば『散文トリスタン物語』によると、トリスタンの剣はシャルルマーニュを介して、オジエ・ル・ダノワの手に移ります。こうしてトリスタンの有名な剣クルテーヌはオジエの剣となり、アーサー王物語へと接続していきます<sup>39)</sup>。騎士道の理想は、ある世界から別の世界へと連続しているのです。

こうした「運命の」剣が、定められた1人の人物の手に渡って守られ

---

38) *La Mort le Roi Artu*, roman du XIIIe siècle, éd. par Jean FRAPPIER, Genève-Paris, Droz-Minard, 1964<sup>2</sup> (TLF 58), pp. XVII-XVIII.

39) コルテーヌについては、ウェストの固有名詞事典 (WEST, *An Index of Proper Names in Arthurian Prose Romances*, *op. cit.*, s. v. « Cortaine ») のほか、拙著 (Richard Trachsler, *Disjointures-Conjointures. Etude sur l'interférence des matières narratives dans la littérature française du Moyen Age*, Tübingen-Basel, A. Francke Verlag, 2000 (Romanica Helvetica 120), pp. 106-107) を参照。トリスタンの剣は、ル・モロルトと対戦したときに刃こぼれを起こした。そのため剣が壊れているのを認めたオジエは、剣を鍛え直してもらう。それにより剣が前よりも短くなったため、剣は「コルテーヌ (短い)」と呼ばれるようになった。

るとしても、驚くにはあたりません。『双剣の騎士』はその冒頭で、「カラディガンの姫君」の脇に剣を結びつけていた解くことのできない帯革を前に、アーサー王宮廷の騎士全員が試練に失敗する場面を描いています。『続メルラン物語』は同じ状況を、より深刻な調子で描いています。エクスカリバーはもちろんのこと、鉄床に刺さった状態で現れ、添えられた銘文には、剣を引き抜くことができる者が王になると記されていました。石段の真ん中にあった鉄床から誰もこの剣を抜けない中、若きアーサーだけが成功したのは何よりも、彼が亡くなった王の息子だったからであり、メルラン [英語名マーリン] だけがこの事情を知っていました。したがって剣の試練はアーサーに定められたものであり、アーサーは己の剣を手に入れたのです<sup>40)</sup>。「後期流布本サイクル」の『メルラン物語』が伝える別のバージョンによると、ある乙女が魔法の湖からアーサーの許へ、不可思議な帯革とともにエクスカリバーを運んできます。その乙女は明らかに「湖の貴婦人」の許からやってきたことから「異界」の住人であり、まっすぐにアーサー王の御前へ向かいます<sup>41)</sup>。

剣がどこからやってきて、どうやって定められた所有者の手に渡るのかがケースごとに異なっていたとしても、それは大した問題ではありません。重要なのは毎回、個人的な剣が出てくると、剣の所有が公的な意味を帯びる可能性があることです。剣は社会的には名誉の証となり、政治的には選ばれた証となります。また見たり触れたりすることで確認が可能なことは、常に剣の所有者の価値を示す反論を許さぬ証拠となります。

---

40) このエピソードの解釈については、カルロ・ドナの前掲論文 (Donà, « Da Perceval a Meriadeuc ») および、拙著 (Richard Trachsler, *Merlin l'Enchanteur. Etude sur le "Merlin" de Robert de Boron*, Paris, SEDES, 2000, pp. 135-142) を参照。拙著は刊行の年 (2000年) 以前に出された文献の目録も収録している。

41) *Suite du Merlin*, éd. Roussineau, §63, p. 50.

## ガラアドの剣と聖ガルガーノの剣

剣が果たす機能については一方で、その重点が選出へと移っていくことが確認できます。その場合、剣の試練は候補者全員の中から主人公を際立たせ、政治上の正当性よりも宗教上の正当性を主人公に授けるのに使われています。

たとえば〔古フランス語散文物語〕『聖杯の探索』〔1225-1230年頃〕によれば、「漂う石板」に刺さった剣を抜くことができるのはガラアドだけであり、それにより最良の騎士だった父ランスロ〔英語名ランスロット〕を凌駕します。さらにガラアドがダビデの剣を手にするに至る場面では、同じく聖杯の探索を最後まで続けるために選ばれた2人の仲間ベルスヴァルとボオールよりも、ガラアドが上位にあることが明らかにされています<sup>42)</sup>。ここでの眼目は、宮廷風騎士道の古い規範よりも、新たな価値体系が上位にあることを示すことなのです。そのため「所有者が定められた剣」のモチーフは、ただ単に宮廷風騎士道の脈絡だけでなく、宗教的な脈絡においても有効であることが明らかになります。

12世紀のトスカナ出身の騎士で隠者となった聖ガルガーノの例を、改めて考察してみましょう。伝説によるとガルガーノがローマ法王の許へ向かうとすぐに、彼が隠者の庵の近くにあった岩の中へ突き刺した剣を、悪

---

42) 『聖杯の探索』のテキストはポーフィレ版による (*La Queste del Saint Graal : roman du XIIIe siècle*, édité par Albert Pauphilet, Paris, E. Champion, 1923 (Classiques français du Moyen Age 33))。「漂う石板」のエピソードは pp. 12-13、ダビデの剣のエピソードは pp. 202-203 に見つかる。カーマンは『聖杯の探索』の剣のエピソードと『メルラン』の一節との比較を試みている (J. Neale Carman, « The Sword withdrawal in Robert de Boron's *Merlin* and in the *Queste del Saint Graal* », in *PMLA* 53 (1938), pp. 593-595)。『聖杯の探索』の中で剣が出てくる複数の箇所解釈については、ウィリアムズの論考を参照 (Andrea WILLIAMS, « The Enchanted Sword and the Quest for the Holy Grail : Metaphoric Structure in *La Queste del Saint Graal* », *French Studies*, 48 (1994), pp. 385-401, en particulier p. 392)。

意ある人々が引き抜こうとしました。その剣はガルガーノが十字架代わりに使っていたものでした。悪意ある人々は剣を引き抜き、地面から土や岩を掘り起こし、剣を壊そうとしましたが、それには至りませんでした<sup>43)</sup>。剣はその正当な所有者が選んだ場所から動くことはなかったのです。たとえ聖ガルガーノの剣がその役割を変え、それ以後十字架として使われたとしても、剣は聖人のものであり続けたのです。

### 結びに代えて——3本の剣が持つ意味

ここまで紹介してきた様々な類例は、『双剣の騎士』の理解にとってどのような意味を持ってくるのでしょうか？ まずは、剣の譲渡のモチーフが完全に伝承を踏まえたものであることが分かります。メリヤドゥックが最初に手にする剣は、彼の主君にあたるアーサー王から授けられたものであり、2本目の剣はメリヤドゥックの手に渡るよう定められていた個人的な剣で、もともとは彼の父の剣でした。そして3本目の剣は、これも同じくメリヤドゥックの手に渡るよう定められていたものですが、彼の名前を明らかにするばかりか、祖父の名も知らせているため、メリヤドゥックを代々続く一門の系譜の中へ位置づけています。

3本の剣にはいわば進展も見られます。最初の剣は騎士叙任を迎えた若き近習に王が授ける「スタンダードな」武具であり、2本目の剣は一門に伝わる個人的な剣であり、3本目の剣は不可思議な騎士が所有していたものです。不可思議な騎士は明らかに、3本目の剣がメリヤドゥックの手に

---

43) 実際には、悪意ある人々がガルガーノの留守中に、彼の剣を折ってしまっていた。ローマから戻ったガルガーノは、十字架代わりの剣が折れているのを見てひどく悲しむが、元の場所に戻すと、神の計らいで剣は元通りになる。この筋書きについては、マリオ・モイラギによる解説を参照 (Mario Moiraghi, *L'enigma di San Galgano: la spada nella roccia tra storia e mito, prefazione di Goffredo Viti*, Milano: Ancora, 2003, pp. 39-41)。

渡るようにしていました。主人公は社会と一族の一員となった後で、いわば「異界」に取り込まれています。このように見ると、筋書きはすべて理路整然としているように思われるかもしれませんが。

それでも詳しく検討してみると、剣の試練が持つ働きは文学伝承を歪めたものとなっています。騎士社会への最初の扉を開く鍵となる剣は、アーサー王が主人公に授けたものであり、これが別の剣にとって代わられることとなります。3本の剣の中では唯一この最初の剣については、文学伝承の中に先行例が見つかります。メリヤドゥックは冒険の最中に、最初の剣を母親の許へ残し他の2本を持っていきます。これに対してメリヤドゥックがロールの脇から外した剣は、確かに亡き父の剣でしたが、それを手にすることで若者は一門の一員として認められたのではなく、妻の獲得を可能にしたのです。言い換えれば、父の剣の獲得が重要であるはずの2本目の剣の試練は、もともとロールとの結婚という褒賞とは何の関連もありませんでした。それどころか、2本目の剣の試練は3本目の剣を、それがどんなに不可思議な剣であれ、蛇足に近いものになっています。

3本目の剣には、主人公が自ら確認するように、自分の「祖父」の名前である「メリヤドゥック」が刻まれていました。この祖父はひょっとすると、3本目の剣が主人公の手に渡るようにした「不可思議な」騎士にあたるのかもしれませんが。このように固有名詞が最後に明かされることが意味を持つには、主人公が物語の冒頭からあらかじめ父親の剣を持ってはならず、さらには物語の途中で主人公があらかじめ母親と再会し、一族をめぐる話を知らされてはいけません。確かに主人公には名前がありませんでしたが、そもそも祖父の正体が「全く不明」なのに、名前をこれほどに華々しく明らかにすることに何の意味があるのでしょうか？<sup>44)</sup> メリヤドゥックはこのような形で名前が明かされたとしても、円卓騎士団の筆頭騎士ゴーヴァンの息子だと「土壇場で」判明するガングランやボー

ドゥーのような「名無し的美丈夫」の系譜に連なることにはなりません。

物語には謎を明らかにする場面が、1つ余分に用意されているかのごとくです。不可思議な剣を複数登場させ、そのたびに個人的な遺産や運命を読者＝聴衆に明らかにしたり、認めさせようとしたりすることはできません。運命は1つしかないからです。言い換えれば、剣とその所有者を結ぶ元来のきずなが、物語の中で弱まっています。なぜなら主人公は、「美丈夫の近習」、「双剣の騎士」、「貴婦人たちを連れた騎士」、「メリヤドゥック」の順で名前を集めてきたのと同じように、剣を集めてきているからです<sup>45)</sup>。神話的なモチーフはその活力を失い、単なる文学的なモチーフになってしまったのです。つまり複数の剣が表しているのは社会的な身分の上昇であり、クレティアン・ド・トロワが描く主人公が辿った、己の発見にいたる精神的な成長過程を表しているのではなく、ましてや、それぞれの剣の運命と切り離すことのできない神話的な使命の完遂を表しているのでもありません。

文学伝承からの逸脱をこれほどに強く後押しするような物語の中で、神話的なモチーフ群が一層文学的な使われ方をすることで、その影が薄くなっていくとしても驚くにはあたりません。ところで『双剣の騎士』では

---

44) ブージェは前掲論文の中で、「メリヤドゥックの祖先は、彼と同じように評判の高い名無しにすぎず、この場面では名前が人物を世に知らしめるに至ってはいない」と指摘している (BOUGET, « *Li Chevalier as deus espees* », *op. cit.*, p. 81)。

45) 名前をめぐる問題については、ダグラス・ケリーの論考 (Douglas KELLY, « The Name Topos in the *Chevalier aux deux épées* », in : K. Busby et C. M. Jones (éds.), “*Por le soie amisté.*” *Essays in Honor of Norris J. Lacy*, Amsterdam-Atlanta, Rodopi, 2000 (Faux Titre, 183), pp. 257-268) を参照。ノリス・J. レイシーは『双剣の騎士』における名前を扱った論考 (Norris J. LACY, « Naming and the Construction of Identity in *Li Chevaliers as deus espees* », *Romance Philology*, 56:2 (2003), pp. 203-216) 中 p. 207 で、騎士のアイデンティティーを作り上げる「付加的なプロセス」について言及している。

ゴーヴァンが活躍するエピソード群が語られ、その中には噂でゴーヴァンに恋していた乙女〔ル・ポール城主の娘〕が彼と出会うものの本人だと信じられず、ゴーヴァンが辛い思いをするエピソードがありますが、物語の大団円では同じ乙女がゴーヴァンの身許を知り、2人が愛し合うこととなります。こうした筋書きは明らかに、韻文で書かれたアーサー王物語群でのゴーヴァンの名声を読者＝聴衆が熟知していることを前提にしています。一方でメリヤドゥックが手にした3本目の剣は余剰の剣であり、文学と神話双方の伝承と間でずれを見せていますが、ゴーヴァンの伝承に通じた物語の同じ読者＝聴衆は、この3本目の剣に対しても敏感な反応を見せた可能性があるのではないのでしょうか。